

---

## 目次

---

2021国際混合研究法学会アジア地域会議/  
第7回日本混合研究法学会年次大会  
Pages 2-3

キャシー・シャーマズ氏追悼  
Pages 4-5

おすすめ書籍  
Pages 6

学会員の論文紹介  
Pages 7

第6回日本混合研究法学会年次大会振り返り  
Pages 8-12

JSMMRからのご案内  
Page 13

## MMIRAアジア地域会議 日本混合研究法学会第7回年次大会 2021年10月30-31日 in 東京(バーチャル開催)

### 「社会的大変動時代の混合研究法 (Mixed Methods Research in the Era of Massive Social Change)」



大会長

マイケル・D・フェターズ  
ミシガン大学  
家庭医療学講座教授

実行委員長

抱井 尚子  
青山学院大学国際政治経済学部  
国際コミュニケーション学科教授  
日本混合研究法学会理事



国際混合研究法学会 (MMIRA: Mixed Methods International Research Association) の2021年アジア地域会議、および日本混合研究法学会(JSMMR: Japan Society for Mixed Methods Research)の第7回年次大会は、青山学院大学がオンラインホストを務めています。

組織委員会は、今年の会議のテーマとして、

「社会的大変動時代の混合研究 (Mixed Methods Research in the Era of Massive Social Change)」を選びました。COVID-19のパンデミックは、世界中の誰もが少なからず影響を受けています。このパンデミックは、各国がすでに経験していた多くの社会問題や健康問題を悪化させました。社会の複雑な変化に伴い、研究者は質的調査と量的調査を統合した混合研究法による調査の力を活用する必要があります。この「新しい世界」において、世界の研究コミュニティは、混合型の研究アプローチを使用したり、新しい混合研究法の方法論を開発したりすることで、創意工夫をもって対応してきました。本会議では、哲学、方法論、手法といった混合研究法の側面からの発表を歓迎します。

招待講演には、ジョン・クレスウェル博士、ティモシー・ゲッターマン博士、ミシェル・ニコルズ氏 (MMIRA会長) がスピーカーとして参加する予定です。今回の会議では、中国、韓国、台湾をはじめとするアジア諸国/地域の混合研究法に関わる

研究者が参加する、人気の高い「アジア・オープン・フォーラム」を再び開催します。

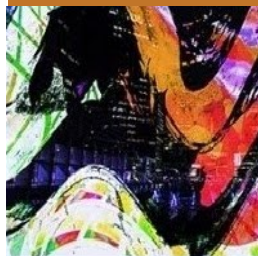
基調講演、パネルディスカッション、オリジナル研究の口頭発表やポスター発表、ワークショップ、ソフトウェアや書籍のベンダーによる書籍展示と販売、「meet a presenter」の会場など、初心者から上級者まで、あらゆるレベルの方法論研究者にアピールする会議です。学生の方は割引料金でご参加いただけます。投稿のカテゴリーは、理論的・哲学的な視点など多岐にわたります。発表形式は、ポスター発表と口頭発表があります。

なお、本イベントへの参加には、参加登録が必要です。皆様とバーチャルでお会いできることを楽しみにしています！

☆詳細は下記をご覧ください。

<http://www.jsmmr.org/conference/jsmmr2021/jpn/#reg>

文責: マイケル D. フェターズ  
ミシガン大学  
家庭医療講座教授



社会的変動時代の混合研究法  
Mixed Methods Research  
in the Era of Massive Social Change

2021/10/30(sat)-31(sun) @オンライン開催 online

2021 MMIRA Asia Regional / 7th JSMMR Annual Conference  
2021 MMIRA アジア地域会議 / 第7回日本混合研究法学会年次大会

参加登録  
受付中



2021. 10月

第9号

大会Webページ

<http://www.jsmmr.org/conference/jsmmr2021/>

カンファレンス参加登録: 2021年10月29日23:59まで  
ワークショップ(登録者無料): 2021年10月25日23:59まで

【2021年10月23日(土) 9:00 ~ 2021年11月28日(土) 23:59】

バーチャル大会サイト・アクセス期間

大会に参加登録をされた方は、上記の期間、バーチャル大会サイトにおいて、オンデマンド形式のプレゼンテーションのビデオ・ポスター・スライド等に24時間アクセスできます。

【2021年10月30日(土) 1日目】

9:00-10:30	プレカンファレンス・ワークショップ 1 大規模な社会変化の時代における混合研究法のトレーニングの発展 提供者: ティモシー C. グッターマン (英語)	プレカンファレンス・ワークショップ 2 ポジティブ・ディビアンズ: より良い社会課題解決に向けて MMR 活用するアプローチ 提供者: 河村 洋子 (英語&日本語)
10:50-12:20	プレカンファレンス・ワークショップ 3 混合研究法における質の基準を再評価する 提供者: ジョン W. クレスウェル & 廣瀬眞理子 (英語 & 日本語)	プレカンファレンス・ワークショップ 4 混合研究法統合三部作を用いた高度なプロジェクトの実施 提供者: マイク D. フェターズ (英語&日本語)
13:00-13:20	開会式 大会長: マイク D. フェターズ 司会: 井上真智子	
13:20-14:30	パネルディスカッション: COVID-19 時代の混合研究法 座長: 抱井尚子 パネリスト: マイク D. フェターズ, 亀井智子, ドミニク フローチ	
14:40-15:50	講演 1: アジアにおける混合研究法の普及に向けて 演者: ジョン W. クレスウェル 座長: 廣瀬眞理子	
16:00-18:00	バーチャル懇親会 & “ミート・ザ・プレゼンター” セッション (一般演題発表者への Q&A セッションを中心とした交流会)	

【2021年10月31日(日) 2日目】

8:00-9:30	アジアオープンフォーラム: 混合研究法の学びと実践ーアジア圏を離れてえられたものは何だったのかー 座長: マイク D. フェターズ, 田島千裕 ディスカッサント: スイ・ホウ, チョウ・ホンリン, ワンサック・リー, ジェレマイア・オピニャノ
9:40-10:50	講演 2: 変革の担い手としての看護師: 混合研究法を用いた有意義なインパクトへの示唆と機会 演者: ミシェル ニコルズ 座長・通訳: 河村洋子, 亀井智子
11:00-12:10	講演 3: 混合研究法における分析手法の進歩 演者: ティモシー C. グッターマン 座長・通訳: 成田慶一
12:20-13:30	講演 4: 修辭的分析的構造を混合型研究に用いる: 東アジアにおける「起承転結」の世界観 演者: 八田太一 座長: マイク D. フェターズ
13:50-14:00	閉会式 大会実行委員長: 抱井尚子
14:10-15:10	日本混合研究法学会総会



## 追悼

### 「キャシー・シャーマズの手本にならって」

グレゴリー・ハドリー  
 (ハドリー浩美 訳)

### 新潟大学人文学部人文学科教授

初めてキャシー・シャーマズ先生に会った時のことを懐かしく覚えています。2011年のことです。私は博士課程の研究をほぼ終えようとしていました。他の多くの人と同様に、博士号取得までは孤独な道のりでした。私の指導教員たちは、私の研究にグラウンデッド・セオリーを使用することを提案しました。しかし、彼らはグラウンデッド・セオリーについて何も知らなかったし、どのようにしてグラウンデッド・セオリーを使うかについても関心がありませんでした。私には頼れる人がいませんでした。しかし、私はグレーザー、ストラウス&コービン、クラーク、そしてもちろん、キャシー・シャーマズの主要な作品の多くを手に入れることができました。最終的に、私はキャシーが提唱したグラウンデッド・セオリーの方法論を採用することにしました。

私の博士課程も終盤（しゅうばん）に近づいてきました。指導教員は親切でしたが、彼らはグラウンデッド・セオリーについてアドバイスがなかなかできませんでした。当時私は多くの質問を持っていました。たとえばグラウンデッド・セオリーの方法論を間違えて理解していないか。私のグラウンデッド・セオリーは興味深いセオリーになっているか？情報提供者の懸念を反映していたか？異なる社会的状況にある人々を助けることができるのか。そういった答えを得るため、専門家の意見が必要でした。

そこで私は、カリフォルニアのソノマ州立大学のキャシー先生に連絡を取りました。私は先

生にお会いできるかどうか尋ねました。先生は「おいでください」と返事をくださいました。

私はカリフォルニアに飛び、車でソノマ州立大学に行きました。キャシー先生は私に、キャンパスの真ん中にあるコーヒーショップで彼女の授業が終わるまで待っているようにと言ってくれました。ところで、私はそれまでキャシーの写真を見たことがありませんでした。今の時代は違いますが、当時はインターネット上で知らない人の写真を探るのはちょっと気が引けました。それで、キャシー先生は、車輪付きの紫色のブリーフケースを転がす、白い髪をした女性を探すよう言ってくださいました。

実際キャシー先生が現れたとき、正直なところ、私は驚きました。白い髪がふさふさしていました。ブリーフケースは大きなスーツケースのようでした。キャシー先生は疲れ果てているように見えました。まるで重荷を背負っているかのようでした。挨拶をしたあと、キャシー先生は疲れてお座りになりました。ブリーフケースには添削しなければならないレポートやエッセイがいっぱい入っているということでした。しかし、コーヒーを飲みながら、次第にリラックスされたようでした。そして、キャシー先生は私に目を向けました。一見、目は霞んでいるように見えましたが、視線は突き刺すようでした。同時に、キャシー先生の顔にはわずかに穏やかな微笑みがありました。私は自分が非常に賢明な女性の前にいることに気がつきました。  
 (次頁につづく)

## 「キャシー・シャーマズの手本にならって」

グレゴリー・ハドリー  
(ハドリー浩美 訳)  
新潟大学人文学部  
人文学科教授

(前頁よりつづき) 私が先生に、「プロフェッショナル・ディスアティキュレーション」という私の構築したグラウンデッド・セオリーについてお話している間、キャシー先生は方法論や概念について時折質問するだけで、静かに関心を持ってお聞きになっていました。しだいに先生は快活になりました。そして、キャシーは、グレーザーとストラウスの指導の下で、博士課程の時代を過ごしたときの話を始めました。

キャシー先生とのミーティングはそろそろ終わるところでした。私が立ち上がると、キャシーは私を止めて言われました、「グレッグさん、あなたはうまくやっているといます。これはとてもいい研究です。これから博士号を取得するまで、がんばってください。」

グラウンデッド・セオリーのやり方を独学で学んでいた者にとって、キャシー先生のこの言葉は私の心に大きな励ましとなりました。世界で最も偉大なグラウンデッド・セオリーの専門家に認めていただき、新たな自信を持つことができました。将来直面することになる問題に対処するための勇気を与えてくれました。

それから、私たちはよくメールで連絡を取り合いました。時々ワークショップで会ったり、私がソノマ州立大学を訪問していた時に会ったりもしました。私たちのメールでのやりとりは、先生がこの世を去る一ヶ月半前まで続きました。今では、そのメールが私の宝物になっています。

私はキャシーからグラウンデッド・セオリーについて多くのことを学びましたが、それ以上のことも学びました。私はキャシーが他の人と交流するのを観察しました。先生は院生と過ごす時間を楽しんでいました。キャシー先生は多くの人とのメールのやりとりをしていました。

多くの人のメンターであり、時間をかけてアドバイスをしたり、励ましたりしていました。レストランや学会では、人々がキャシーに歩み寄って、勉強や研究論文で彼女の助けを借りたことに対してお礼を言う姿を見ることがよくありました。私が小耳に挟んだ中には、研究が困難な時に助けてくれたことに感謝する人もいました。

私の考えでは、これらは優れた教師がよく実践することです。私たちはキャシーの例を思い出すべきだと思います。ここにいる私たちの多くは大学教員です。私たちは可能な限り最高の研究者であるべきですが、可能な限り最高の教師でもあるべきです。私たちの周りには、私たちのアドバイスを必要とし、励ましを必要としている若い人たちがいます。キャシー・シャーマズの手本にならって、私たちも自分の人生の中で受けた親切を周りの人に分かち合うべきだと思います。これがキャシーを称えることになるだろうし、これが世界をより優しく、より良い場所にする助けとなると信じています。



📖 おすすめ書籍

『混合研究法の手引き  
トレジャーハントで学ぶ研究デザインから論文の書き方まで』

新刊

マイク D. フェターズ・抱井尚子 編 (2021) 遠見書房



本書のアイデアは、2016年に開催された第2回日本混合研究法学会の年次大会ワークショップのために生まれました。混合型研究の査読の方法をワークショップで教えてほしいというリクエストに対し、マイク・フェターズ先生（ミシガン大学）が考案されたのが、本書で紹介する混合研究法を宝探しゲームの感覚で学ぶ方法です。混合型研究論文を執筆または査読する上で押さえるべきポイントを「トレジャー（宝）」に喩えて第1章で解説し、続く各章では混合研究法のデザイン別に、実際に出版された論文を通して混合型研究のポイントが学べるようになっていきます。創意工夫に富んだジョイントディスプレイの例も紹介されており、これ1冊で混合型研究のキーポイントがわかるようになっていきます。本書で紹介するトレジャーハントのアプローチを混合型研究論文のクリティークの練習に応用したり、授業の中でチームに分かれて混合型研究論文の宝探しゲームを競い合ったりと、本書の使い道は色々です。

文責：抱井 尚子  
青山学院大学国際政治経済学部  
国際コミュニケーション学科教授  
日本混合研究法学会理事

## 学会員の論文紹介

太原達朗, 工藤秀平, & 守屋亮 (2021). 学習者の視点から見た英語による専門科目(EMI)に必要な英語力のニーズ分析. *EIKEN BULLETIN*, 32, 190-217.

[https://www.eiken.or.jp/center\\_for\\_research/list\\_1X/32/](https://www.eiken.or.jp/center_for_research/list_1X/32/)

- ・活用事例が限られているGTxAを用い英語による専門科目に必要な英語力を把握するためのニーズ分析を実施した多段階型のMMR。

Mori, Y., & Stracke, E. (2021). Student teachers' expectations and their sense of fulfillment in a TESOL program. *Australian Review of Applied Linguistics*. <https://doi.org/10.1075/aral.19054.mor>

Mariko Nishikawa, Masako Okayasu, Yuko Tsuda, & Kiyoka Niiya (2021), Nursing care for overseas visitors in Japan: A text-mining and logistic regression analysis, *Japan Journal of Human Health Care*, 5, p9-22.

Tajima C., Fetters M.D. (2021) Study Abroad in the Philippines and Canada by Japanese Undergraduate Students: A Comparative Mixed Methods Study. In: Goonetilleke R.S., Xiong S., Kalkis H., Roja Z., Karwowski W., Murata A. (eds) *Advances in Physical, Social & Occupational Ergonomics*, 273, 464-469. Springer, Cham. [https://doi.org/10.1007/978-3-030-80713-9\\_59](https://doi.org/10.1007/978-3-030-80713-9_59)

- ・先端的なジョイント・ディスプレイを掲載している。

### 2020年以前

Chiba, H., Ogata, T., Ito, M., & Kaneko, S. (2018). Identification of Topics Explained by Home Doctors to Family Caregivers with Cancer Patients Died at Home: A Quantitative Text Analysis of Actual Speech in All Visits. *The Tohoku journal of experimental medicine*, 245(4), 251–261. <https://doi.org/10.1620/tjem.245.251>

H Tsutsui, K Nomura, A Ishiguro, Y Tsuruta, S Kato, Y Yasuda, S Uchida, Y Oshida. (2017). Factors associated with employment in patients undergoing hemodialysis: a mixed methods study. *Renal Replacement Therapy* 3:23. DOI: <https://doi.org/10.1186/s41100-017-0105-z>

- ・探索的順次デザインの一部で得られたデータを使って分析している。

H Tsutsui, K Nomura, M Kusunoki, T Ishiguro, T Ohkubo, Y Oshida. (2016). Gender differences in the perception of difficulty of self-management in patients with diabetes mellitus: A mixed methods approach. *Diabetology International* 7, 289-98. DOI: [10.1007/s13340-015-0249-4](https://doi.org/10.1007/s13340-015-0249-4)

- ・糖尿病論文は収斂デザインで行った。

## 第6回日本混合研究法学会年次大会振り返り 2020年10月



### 第6回日本混合研究法学会年次大会を振り返って 大会長 稲葉光行 (立命館大学教授／日本混合研究法学会理事長)

日本混合研究法学会第6回年次学会（2020年10月24－25日）は、COVID-19の感染拡大を受けて、当学会として初めて、全ての企画をオンラインで実施する形で開催され、成功裏に終わることができました。この大会にご協力とご尽力をいただいたすべての皆様方に、改めて御礼を申し上げます。

今でこそオンラインでの学術集会はめずらしくはなくなりましたが、当初のホスト校であった宮城教育大学の会場を香曾我部実行委員長に確保していただいた後、ゼロからオンライン開催の可能性を検討しはじめた時点では、安定したシステム運用やスタッフの動きについて、大会長である私自身も明確なイメージを持っていませんでした。またWeb会議システムについて企業に相談しようにも、テレワークへの移行や連休が重なり、見積などがなかなか入手できない状態が続き、私自身としては、大会のキャンセルもやむを得ないのではと何度も考えました。

そのような中で、理事会／実行委員会の先生方から「学術活動を止めてはいけない」という強いご意見を頂き、また「この状況だからこそできる企画を考えていきましょう」といったご提案をいただいているうちに、大会での企画に関するアイデアがどんどん広がっていきました。海外の先生方による出版記念講演、「質・量を超えて」というテーマを掲げたパネル、COVID-19に関わる特別講演、さらにキャシー・シャーマズ先生の追悼企画など、学術的にも日本の混合研究法コミュニティにとっても意義深い企画が追加されていきました。さらに、バーチャルなテーブルを囲んだ懇親会や、休憩時間のエキササイズを促すスライドなどのご提案があり、オンライン大会の成功という1つのゴールに向かって、理事会／実行委員会における拡張的学習が起きつつあることを感じました。

考えてみれば、実会場を使った従来型の大会では、部屋の手配だけでなく、案内板、部屋の割

当、スタッフの配置、電源の位置、参加者の方々の導線にいたるまで、非常に細かい検討を綿密にしておく必要があります。一方オンライン大会では、ハンズ・オンによるワークショップなどが開催しにくいという課題はあるものの、アナログ空間からの制約から解放され、デジタル空間の特長を生かしてより柔軟に企画を考えられるというメリットもあるのではと感じはじめておりました。

このような紆余曲折を経て開催されたオンラインの年次大会では、最も懸念していた深刻なシステムトラブルも発生せず、またそれぞれの企画も知的刺激に満ち溢れた大会になったと私自身は考えております。大会後のアンケートでも、内容面の高評価に加えて、移動なしで参加できる開催形態についても多くの参加者の方々から肯定的なご回答をいただきました。結局のところ、当初は大変な「危機」と思っていたことが、実は本学会のデジタルトランスフォーメーションにとっては非常に大きな「チャンス」であったということ強く感じた大会でした。

とにかく、当学会として初めてのオンライン大会でありながら、全体として成功裏に終わることができたのは、実行委員の先生方の士気の高さ、講演者・展示企業の方々のご助力、そして参加者の皆様方のご理解のたまものだと思っております。改めて、本大会に関わったすべての皆様方に、心から御礼を申し上げます。

今回の大会では、これまでのアナログの大会で蓄積されてきた経験と、デジタル時代ならではの新しいメディアや自由な発想が統合され、当学会としても、ニューノーマル時代にふさわしい新たな一歩を踏み出すことができたと感じております。今回の貴重な経験や学びを元に、今後もさまざまな企画や年次大会のアイデアを打ち出すことで、日本の混合研究法コミュニティのさらなる発展につなげることができればと思っております。

## 第6回日本混合研究法学会年次大会振り返り 2020年10月



### 基調講演1 MMR出版記念講演1 「Activities for Designing, Implementing, and Publishing MMR Projects」

講師:マイケル D. フェターズ  
Michael D. Fetters

ミシガン大学家庭医療学科教授

基調講演1では、フェターズ先生より新しく出版された「The Mixed Methods Research Work Book」の内容を通して、混合研究法を身につけるためのステップについてお話がありました。初学者の私は、以前にフェターズ先生に、「どのようにすれば、混合研究法が理解できるようになりますか？」と尋ねたことがあります。その時には、「とにかく、やってみることだよ。やりながらわかってくるんだよ。」と、流暢な日本語でやさしく教えて下さいました。前回の学会かセミナーでもこの本の紹介があり、すでに私の手元にあります。

読者の立場からの感想として、周囲になかなか教えてくださる先生方がいない院生や研究者にとって混合研究法を効率的に学べる要素が沢山詰まっています。今回も紹介されたように、各章ごとには、学習者が飛びつきたいトピックが整理されています。講演では、フェターズ先生のダジャレも飛び出す「ワクワクするワークアクティビティ」の紹介や、学習者のニーズに合わせて「どこから読んでもいいのですよ」という説明に、心ときめいた学習者も多いと思います。このように学習者が楽しみながら、しかも、かゆいところに手が届く、孫の手のような本だと思います。

もちろん、「英語なんですね・・・トホホ」、とアレルギーがある方がいるかもしれませんが、実はこの手の本は英語の方が論理的、且つ、端的にまとめられていることが多く、ストレートに説明されているので辞書もひきつつ、読み始めると「わかる！」という感覚が生まれると思います。英語も研究法も「わかる！」一石二鳥の本だと思われま。もし、それでもアレルギーが・・・と躊躇する場合は、また学会等で一緒に読んでみるといった初学者のためのワークショップが開かれるのではないかなあと予想しています。日本混合研究法学会(JSMR)は、折々に初学者のためのワークショップやセミナーを開催します。私もそのような機会をいつも楽しみにしています。

そして、フェターズ先生の「とにかく、やってみることだよ！」という言葉に頼りに、日々取り組んでいます。その成果を報告するべく学会参加の際には、先生方にいつも質問等にも答えて頂いたり、温かい示唆を頂いたりして、新しい学びを得る喜びに満たされています。

報告者:

岡本美代子  
順天堂大学医療看護学部

## 第6回日本混合研究法学会年次大会振返り 2020年10月

### 基調講演2 MMR出版記念講演2

#### 「The Rapid Development of Mixed Methods Research: The 2nd Edition of “A Concise Introduction” from SAGE」

講師： ジョン W. クレスウェル  
John W. Creswell

ミシガン大学混合研究法プログラム



2020年10月に、オンラインにて開催された第6回日本混合研究法学会におけるJohn W Creswellによる基調講演「The Rapid Development of Mixed Methods Research in Last 5 Years : The 2nd Edition of “A Concise Introduction” from SAGE: 混合研究法の躍進」は、これまでさまざまな領域の研究者が洗練、発展させてきた混合研究法アプローチの直近5年に焦点を当てたものであった。

初めにJohnの幼少期の写真、家族写真の紹介からスタートした。メソドロジストとしてのJohnをご存知の方は多いと思うが、家族写真を自ら笑顔で説明する様子から、彼の人としてのあたたかみを感じた方もおられたのではないだろうか。

次に、彼の混合研究法入門の本“A Concise Introduction of Mixed Methods Research”について、2014年の初版（青山学院大学の抱井尚子先生の素晴らしい翻訳により、『早わかり混合研究法』として出版されている）と、近々刊行予定である第2版ではどのように内容が変更されているのかについて豊富な資料も入れて紹介した。ジョンズ・ホプキンス、ハーバード、ミシガン各大学で実施されている、NIH（米国国立衛生研

究所）混合研究法トレーニングプログラムにおける長年の関与で得られた知見は、初版で説明された混合研究法の核となる5つの特徴を、さらに第2版では統合、デザイン、そしてメタ推論の3つの中心的アイデアに絞り込んでいる。新しく追加された混合研究法のクオリティの基準も確認しておく必要があるだろう。研究の取り組みは、重要なポイントを押さえてできるだけシンプルにわかりやすく示す必要があると彼は言う。これは、初版、第2版とも変わらない点である。ともすれば必要以上に研究を複雑にしてしまいがちな研究者（私自身も含めて）にとっては、研究の基本姿勢に立ち返る必要性を呼び起こすものであった。

報告者：

廣瀬真理子  
関西学院大学

## 第6回日本混合研究法学会年次大会振り返り 2020年10月

### 〈MMR オープンフォーラム〉

#### 「混合研究法で質的・量的研究の「危うさ」を乗り越えられるか」

企画・司会: 抱井尚子氏(青山学院大学国際政治経済学部教授)

登壇者: 石川慎一郎氏(神戸大学教授、応用言語学・コーパス言語学)  
グレッグ美鈴氏(神戸市看護大学教授、看護キャリア開発学)  
成田慶一氏(京都大学医学研究科客員研究員)

このフォーラムは、登壇者の先生方にご自身が取り組む質的、量的研究方法の「危うさ」について話題提供をしていただくというユニークな切り口でスタートしました。

まず石川先生は、コーパス言語学研究の動向について紹介されました。かつて言語学では探索的・記述的研究が主だったが、その後検定が欠かせない手続きとなり、しかし現在では有意差の検定への信頼も揺らぎが生じているとのこと。最近では頻度論に基づく $p$ に代わり、ベイズ統計の $BF$ を使用すべきという見解もあり、今後の展望としては、価値発見思考、探索型検定、量質多様なデータのトライアングレーション、ひいては「型のない混合研究法」のような方向性に進むのではないかと、という考えを示されました。

次にグレッグ先生は看護学における質的研究について、指導者、テーマ、フィールドの獲得など研究の入り口部分にハードルがあることを指摘されました。実践過程においては、辛い体験等を聞き取る際に相手と研究者の両方が精神的な負担を負うリスクがあること、フィールドに溶け込みながら研究者の立場を保つことの難しさ、等も課題となるとのことでした。

続いて成田先生も加わったパネルディスカッ

ションでは、各研究手法の「物足りないところ」や「うらやましいところ」を指摘し合いながら議論が展開しました。研究者の世界観を研究デザインに込めるのか解釈に投影するのか、主観を排除しようとするのか大切にするのか等様々な量と質の対比が浮上し、混合研究法がこれら異質な価値観を統合し多面的な視点を得ようとしていることに皆さん異論はなさそうでした。ところが、混合研究法が追及する「rigorous」の意義については意見が分かれ、石川先生からは混合研究法の推進者の間に「この超人的な技術を広めたいという思いと、普通の人には登らせたくないという両方の思いがあるのではないか」という刺激的なチャレンジもあり、議論は一気にヒートアップしました。

フォーラム全体を振り返ると、どんな研究方法であっても手法的にrigorousであろうとすることである種の排他性が生じてしまうという矛盾について、深い気づきを得られたように思います。また専門分野や研究手法の異なる先生方が丁々発止の議論を戦わせる様子そのものが、混合研究法の面白さを物語るようなフォーラムでした。ご登壇の先生方には本当にありがとうございました。

報告者:

阿部路子  
青山学院大学

## 第6回日本混合研究法学会年次大会振り返り 2020年10月



### 「特別パネルWith COVID-19 とMMR:公衆衛生学的見地から」

講師：尾島俊之

浜松医科大学教授

新型コロナウイルス感染症の感染拡大の真只中にある2020年、第6回日本混合研究法学会年次大会が10月24日（土）・25日（日）にオンラインで開催されました。年次大会へは第1回目から参加させて頂いており、日頃から数値化・言語化の難しい現象を扱う機会の多い看護実践、看護学への深い洞察と、新たな示唆を得る機会となっています。

今年の年次大会のテーマは、「混合研究法への展望～質と量を越えて～」であり、どのような研究手法を用いることで、関心のある現象がもつ真実に近づくことができ、その現象の説明を可能にするのかをじっくりと考える機会をお与え頂きました。

中でも、浜松医科大学の尾島俊之先生の「特別パネルWith COVID-19 とMMR:公衆衛生学的見地から」では、新興感染症に対峙される中で、予測し得ない出来事の質と問題の大きさを把握し、ラピッドに対策を立てる実践の実装について拝聴させて頂きました。ご講演では、「問題

があがってこないところは、問題が生じていないのではなく、一番問題を抱えている場合もある。なぜ問題が挙げられていないのか、と考えていくことが大切である。」と伺いました。その現象がなぜ生じているのか、を解釈する思考を必要とする混合研究法は、困難に直面している場面で生じている現象の深い解釈をもたらし、的確な対策を導き出すことに貢献することがわかり、生活に根差した研究手法であるのだとの思いを新たにいたしました。

オンラインによる学会の開催は、新しい生活様式に準拠した新たな方法となっていますが、そのご運営には、目にはみえない場面で様々なご苦勞がおありであったかと存じます。例年と変わらずに学会参加、及び演題発表の機会をお与えくださいました大会長の稲葉光行先生、実行委員長の香曾我部琢先生、そして実行委員の先生方に心よりお礼申し上げます。

報告者：

猪飼やす子  
聖路加国際大学大学院看護学研究科

## 大会参加登録

MMIRAアジア地域会議/JSMR第7回年次大会  
(2021年10月30-31日) 青山学院大学(バーチャル)  
につきましては、下記サイトをご覧ください。

<http://www.jsmmr.org/conference>

## 学会員による論文情報募集

学会員による混合研究法の論文の文献情報をお知らせください。2021年以降のものに限らせて頂きます。次号のニュースレターに文献情報を掲載させて頂きます。ご協力のほど宜しくお願い致します。

ニュースレター記事宛先(事務局):

[jsmmr.adm@gmail.com](mailto:jsmmr.adm@gmail.com)

## 編集後記

ニュースレター第9号は、国際混合研究法学会(MMIRA)アジア地域会議/日本混合研究法学会(JSMR)第7回年次大会(2021年10月30-31日)青山学院大学(バーチャル)の告知をお送りしました。二度目のバーチャル大会は国際大会です。海外からも多くの混合研究法研究者を招聘し、ワークショップ、講演、フォーラムを準備しております。学会員の皆様の研究のご発表も本大会のハイライトの一つです。

ニュースレター第9号には、昨年の本学会の年次大会の参加報告も、多くの学会員の先生方にご寄稿頂きました。改めましてご執筆にお礼を申し上げますとともに、第9号の発行が遅れましたことをお詫び申し上げます。

次号のニュースレター第10号は、2022年春の発行を予定しております。10月末の大会の参加報告をご寄稿頂ける学会員の方は、是非事務局メールアドレスまでご連絡くださいますようお願い申し上げます。また、学会員による混合研究法の論文記事の情報も随時受け付けております。是非お知らせいただけますよう、ご協力のほど宜しくお願い致します。

2021年も引き続き新型コロナウイルスの影響で研究および教育活動にさまざまな影響が出ておりますが学会員の皆様のご健康が守られますよう心よりお祈り申し上げます。

ニュースレター記事宛先(事務局):

[jsmmr.adm@gmail.com](mailto:jsmmr.adm@gmail.com)

## 日本混合研究法学会

### ニュースレター第9号

【発行】2021年10月12日

【発行者】日本混合研究法学会

【理事長】稲葉光行

【副理事長】野崎真奈美

【理事】

稲葉光行・立命館大学

井上真智子・浜松医科大学

大河原知嘉子・東京医科歯科大学

抱井尚子・青山学院大学

河村洋子・産業医科大学

香曾我部琢・宮城教育大学

田島千裕・学習院女子大学

成田慶一・京都大学

野崎真奈美・順天堂大学

八田太一・静岡社会健康医学大学院大学

福田美和子・東京慈恵会医科大学

【事務局】

福田美和子・東京慈恵会医科大学

【ニュースレター編集委員長】

田島千裕・学習院女子大学